



特集

北海道の現代短歌活動を牽引
戦前から短歌雑誌『新墾』^{にいほり}を刊行する短歌結社 新墾社

- シリーズ「北海道の木と文化」② … 円空仏〔上ノ国町〕
——道内最大の十一面観音菩薩立像 地域住民に愛されるほほえみの仏像
- ほっかいどうの本 … 『北の鞆ものがたり いたがきの職人魂』 …………… 北海道新聞社
『自然の恵み アイヌのごはん』 …………… デーリイマン社
『イザリに生まれて』 …………… 共同文化社

特集

北海道の現代短歌活動を牽引 戦前から短歌雑誌『新墾』を刊行する短歌結社 新墾社

新墾社は、北海道の短歌結社として明治・大正・昭和の歌人、小田観螢おたかかげいさんが1930年に創設しました。今も、短歌雑誌『新墾』を毎月発行し、2018年には通巻1000号を達成、日本短歌雑誌連盟から優良歌誌として表彰されました。来年1月には創立90周年を迎える新墾社の歴史や活動状況を足立敏彦主宰にうかがいました。
(取材日 6月6日、17日)



あだち としひこ
足立 敏彦さん
短歌結社 新墾社主宰
1932年8月15日、苫小牧市生まれの86歳。北海道学芸大学岩見沢分校（現・北海道教育大学岩見沢校）卒業後、教員となり張市と札幌市の中学校で国語を教えた。父・敏樹さんの影響で1948年、16歳で新墾社に入会。1989年に編集発行人、1990年に代表、1999年から主宰に就任した。北海道新聞の日曜文芸欄で短歌の選者、北海道潮音会代表として歌誌『潮音』選者なども務める。

熱気に包まれる短歌大会

年に一度、社友が一堂に会する新墾社・北海道潮音会合同短歌大会が6月16・17の両日、ホテルポールスタール札幌で開かれました。2日目の全体歌会には約100人が参加。ペンや辞書を手にした参加者の年齢層は60〜80代が中心ですが、会場内は熱気に満ちています。

持ち寄った短歌の中から選出された数首の歌を批評し合います。「口語と文語の表現が混在している」と

いった指摘が飛び出します。比喻の解釈などについても活発な意見が交わされ、反対意見も堂々と主張します。会場内で、私語はほとんどありません。もちろん厳しいばかりではなく、「良いところは大いに褒めます」と足立さん。

今大会作品の最優秀賞は、金田まさ子さんの「ハナアブは花に潜みぬひきこもり六十万余を超ゆると言ふ国」が輝き、大会の締めくくりに記念の盾が贈られました。

女流歌人が短歌界の中心に

新墾社は、現在250人ほどが所属し、作歌活動に励んでいます。道内と東京の1社を合わせて21支社がある中で、最大の札幌支社は毎月、市内中央区大通の市民ホールに数十人の社友が集まり、歌会を開いているほか、北高会が運営する集会施設のノースエイム（北区）で雑誌『新墾』の校正作業などを行っています。かつては24の支社があり、社友も500〜600人を数えました。

1940〜50年代ごろは男性が多かったのですが、いまは逆転し、圧倒的に女性の割合が高まり、歌会に参加する男性は全体の1割ほど。社友の年齢層も次第に上昇し、50代では「若手」になっています。

大会最優秀作品を詠んだ金田まさ子さん（左）





6月に開かれた短歌大会の全体歌会の様子



教え子だった作家の乾ルカさん(左)を紹介する足立主宰



選者も真剣に耳を傾けます

足立さんは、年齢を気にする人には「人生100年の時代。昔の寿命の2倍なんだから、自分の年齢を半分として考えなさい」とけしかけ、歌ができずに悩む社友には「できなくて当たり前。余分にできたら俺にくれ」と笑わせます。

創刊主宰の小田観螢さん、現主宰の足立さんもそうだったように、伝統的に社友には学校の先生が多いそうです。6月の短歌大会で特別講演に招かれた作家の乾ルカさんは、足立さんの教員時代の教え子の一人です。

乾さんは札幌市北区の中学校に通い、国語のテストで「頑張ったな」と足立さんから声を掛けられたのが「うれしくて、国語だけは頑張ろうと思った」と述べ、「文章を書くことが仕事になったのは足立先生のおかげ」と感謝を表しました。社友の一人は「教師冥利に尽きる言葉ですね」と感激した様子で話していました。

短歌の魅力と新墾の特徴

足立さんは、短歌の魅力を「迷路の韻律」にあると言います。5・

7・5・7・7の三十一文字に全てを表現せず、作者があえて隠している部分があります。読み手にとって、その隠れている部分が迷い道であり、作り手は簡単に理解できないよう工夫するそうです。「いくら読んでも分からない、何を言おうとしているのか」と迷い込ませ、その世界に閉じ込めてしまうような作品が優れている」といいます。逆にすつと入って、すぐ出られるような作品は「ミミズの腸」と呼ぶそう。

短歌は虚構を歌にしても構わないのですが、一般的に歌というものは一人称の形が基本だそうです。足立さんは「一人称の世界で遊びなさい。浮気をしたかったら歌の中で表現してごらん。ただ、知人に読まれると誤解されるから、うまくカムフラージュしなさい」とユーモアを交えアドバイスします。

『新墾』創刊主宰の小田観螢さんは「北方的生命感的抒情」を作歌理念に掲げています。これは作風ではなく、歌を詠む態度、姿勢を示しているものです。

小田さんが、この理念を噛み砕いて解説したことはなかったのですが、あえて足立さんに説明していただと『『北方的』』というのは北海道らしさではなく、なお北方を目指



歌の感想を話す参加者

すという精神の北方性です。精神の北方性とは、自分を追い込んで突き詰めていくという世界。『生命感的』というのは生きる喜び、張り合い。抽象的なものではなく具体性」ですが、「教えてもらうものではなく、繰り返し意味を考えながら、自らつかみ取っていくべき境地」だと言います。

新墾誕生からの歩み

新墾社の創設者・小田観螢さんは、岩手県久慈市の出身で、1900年、16歳で北海道に渡ってきました。その後、小樽市や富良野市などの小学校で教員を務めました。明治後期から大正にかけて、浪漫

主義の『明星』、写生主義の『アララギ』のほか、松尾芭蕉らの蕉風俳諧を源流とする象徴主義の『潮音』という三大歌誌が創刊されました。小田さんは、1915年から潮音社に所属し、同会の初代主宰だった太田水穂さんとは「管鮑金石の交わり」というほどの固い友情で結ばれていたそうです。

太田さんの後押しを受け、1930年1月、小田さんは『新壑』を発売します。創刊号には「黒雲の腹を



(右端)『新壑』1000号の表紙、(中央)『新壑』創刊号の表紙、(左端)第18巻9・10月合併号の表紙

いでしと見るはやくまつさかさまにおつる冬の日」という歌を掲載しました。

創刊年と翌1931年は年4号、1932年には年6号を発売できましたが、1933年は3号、1934年は2号にとどまるなど経済的にも不安定でした。ただ、6年目となる1935年以降は多くの支援を得られ、『新壑』は月刊発行になりました。

新壑短歌の基盤には『潮音』の象徴主義があります。象徴主義の原点は古典にあるため、誌上には古典研究が頻繁に掲載されました。

社友も順調に増え、1936年8月には第1回新壑大会を札幌市内で開催。翌年7月には太田さんらを招き、潮音新壑北海道社友大会を開いています。

戦時下と戦後の新壑

新壑短歌が黎明期の盛り上がりを見せる中、1937年7月に支那事変が勃発し、戦時体制の強まりは短歌の世界にも影響を及ぼしました。

小田観螢さんは1937年末、「国の秋あらしすさまじく吹きつり応召兵の幟いや殖ゆ」と詠み、戦地に送られた社友からは「アムールの解水さしる宵闇にひそかにまぎれ

下ろす鉄舟」(古住基さん)「爆音のきこえぬ日とてなき空に湧きつ崩れつ夏雲の峯」(小田哲夫さん)などの作品が届きます。戦意高揚の名の下に短歌は称揚の道が与えられ、戦争賛歌が氾濫していきま

第2次世界大戦の敗戦

が濃厚になり、全国の歌誌統制によって1944年2月号で『新壑』が休刊します。終戦を経て1946年1月に復刊するまでの休刊期は、社友への潮音入社のおっせん、添削指導、各地歌会の振興、会報の発行などでしのぎました。復刊後も物資不足、米軍の検閲もあり、苦勞が絶えなかったようです。

足立さんと

小田主宰との出会い

足立さんは、父・敏樹さんが『潮音』の歌人、『新壑』の選者だったことに影響を受け短歌を詠み始めました。『新壑』に作品が初めて載ったのは、1948年9・10月合併号で、高校1年生の時でした。父が北炭の炭鉱病院で歯科医として勤務していたこともあり、夕張市で教員に



小田観螢歌碑(太田絢子建立) 小樽市天狗山麓の旭展望台



足立敏彦歌碑 夕張滝の上自然公園

なりました。20歳から18年間勤務した夕張には特別な思い入れがあるそうです。

1981年に北炭夕張新炭鉱ガス突出事故があり、かつての教え子の親など93人が亡くなりました。その事を思い、足立さんが詠んだ歌が「龍神の昇れるならむとどろきの峡の激湍紅葉の色」です。この歌が刻まれた「怒りと鎮魂の歌碑」は夕張滝の上自然公園に立っています。

足立さんにとって、主宰だった小田観螢さんは「雲の上の神様のような存在」で、入社してから9年間は一度も会ったことがありませんでした。初めて会ったのは1957年の北海道歌人会。記念撮影の時に小田さんの真後ろで写真に納まったのですが、その日は気付かなかったそうです。

その後も、小田さんとじっくり話したのは、家に呼ばれた1回だけ。小田さんとの思い出は「君は新壘の言葉の番人だよ」という一言です。歌人が文法に詳しいとは限らず、国語教員だった足立さんは言葉の決まり事などをたびたび指摘していたことを、小田さんが「注目してくれていたと分かり、うれしかった」と振り返ります。

活躍する新壘出身の歌人たち

新壘社に所属した歌人で、最も有名なのが中城ふみ子さんです。

1947年に新壘社に入り、戦後活躍した代表的な女性歌人の一人に挙げられます。1954年7月出版の歌集『乳房喪失』は、既存の歌壇から激しい反発が出る一方、若手歌人を中心に熱狂的な支持を得ました。乳がんの転移で、中城さんは同年8月に31歳の生涯を閉じました。

中城さんは、女流歌人興隆のきっかけを作ったと評価され、作品そのものも多くの歌人たちに影響を与えました。足立さんは「賛否両論あつたが、おかげで北海道の歌壇が注目を浴びた」と評します。

もう一人、足立さんが「北海道の歌壇を元気づけた存在」というのが

菱川善夫さんです。北海学園大学の教授などを歴任した国文学者で、1954年『敗北の抒情』で第1回短歌研究社の評論賞を受賞しました。

小樽の学校で小田観螢さんの薫陶を受け、新壘社に入ってからも精神的に評論を書いていました。「社友をちやほやしているから、北海道から良い歌人が育たないんだ」などと辛辣な意見を言うこともあったそうです。全国的な知名度がありながら、北海道を離れることはなく、「北海道の歌壇で現代的な活動ができるようになった」のは菱川さんの功績だと足立さんはいいます。

新壘の今後 体制は柔軟に「歌道」を進む

長らく短歌結社にとって歌誌を発行することは活動の根幹でした。インターネットなどが普及する以前、本に掲載されなければ、だれの目にも止まりません。一人きりで歌を作っても、他人に認めてもらえないので短歌誌を発行する結社などに所属します。このため歌誌を発行できる歌人は、強い発信力と影響力を持つていることを意味し、非常に大きなステータスでした。

しかし、今も昔も短歌誌は、お金

にならない。そうです。足立さんは新壘社で編集発行人を引き受ける際、毎月の『新壘』発行と、1年後に発刊予定の「新壘60周年史」作成に集中するため、4年先の定年を待たずに56歳で退職しました。その退職金も『新壘』につき込む覚悟だったそうです。

短歌界も高齢化が進み、道内で発行される短歌誌も、かつては50誌を超えていましたが、今は十数誌まで減少、全国的にもあちこちで短歌結社が解散しています。足立さんは「気力はあるとはいえ、私も今年で87歳。次をどうするか」を考えて、まずは雑誌の発刊や歌会を開催できる実務体制を整えました。「なんとか100周年は迎えられそう」との手応えを感じつつ、今後の運営体制については後進に期待を寄せているようです。

いま、新壘社では「雑誌はいらないけど、歌会に集まるのは楽しいから」と支社に出入りする社友以外にもいるそうです。顔を合わせながら歌会を楽しむスタイルの方が、雑誌に載ることよりも人気のようです。

足立さんは「これからは若い人も入ってほしい」とも願っています。全道各地に短歌以外にも幅広く活動する社友がいるので、みんなで

声を掛けていくつもりです。「新壘には難解な迷い道の歌の韻律が多いから、取つきにくいかも」という心配もありますが、その一方で、師の開いた一本道をひたむきにたどるという「古くさいとか、封建的と思われるかもしれないが、そんな『歌道』を大切にしたい」と話します。

令和を生きる社友の歌が、新壘社1世紀へ向けた道を歩みます。



新壘発刊1000号記念大会に集った社友（2018年7月1日、2日）

北海道の 木と文化 ②



円空仏 〔上ノ国町〕

道内最大の十二面観音菩薩立像 地域住民に愛される ほほえみの仏像

上ノ国町字上ノ国地区の住宅街の中に建つ上ノ国観音堂。この中に円空仏の十二面観音菩薩立像が安置されています。頭部に11の顔を持つ観音様で、台座を含めた全長は146・6センチと、道内に現存する円空仏では最大です。

道指定有形文化財の観音像をまつる観音堂を管理運営するのは、地域住民で組織する上ノ国観音講です。毎週土曜日には観音堂に集まり、お経を上げた後、ストローを囲んでおしゃべりをして過ごす。観音講の一員で近所に住む女性は「この円空さんは本当に、利益あんだよ。ちゃんと拜んでおきなさい」と笑顔で話します。

未開の北海道を旅した円空

円空仏は江戸時代、僧侶だった円空が鈍一丁で彫ったとされる木の仏像で、丸木の面を生かした荒削りの木肌には、ほほえみをたたえた表情が特徴です。円空は、12万体の仏像を造ることを目標に掲げ、東海地方を中心に、膨大な数の仏像



上ノ国観音堂所蔵の十二面観音菩薩立像、右下には観音菩薩坐像も安置されている

を残しました。これらの多くは、三百数十年にわたり、地域住民の身近な神様・仏様である「円空さん」として大切にまつられています。

史料の少ない円空ですが、1631年に岐阜県で生まれたとされています。7歳の時に木曾川の洪水で母を亡くし、寺に預けられ出家しました。滋賀県と岐阜県にまたがる伊吹山の山中で修行を積み、仏像などを彫り始めたようです。最も古い像は1663年、32歳のころに彫ったものが確認されています。その後、1666年1月、35歳の時に東北地方を訪れ、同年6月には北海道へ渡ってきたようです。

円空は、松前藩の領地よりさらに奥地へも足を踏み入れ、日本海側はせたな町大成地区の太田山、太平洋側は伊達市の有珠山に、仏像を残した記録が残っています。

ほっかいどうの本

（お近くの書店にない場合は
発行先へお問い合わせください
特記以外は税込価格です）

北の鞆ものがたり

いたがきの職人魂

北室 かず子 著
北海道新聞社 発行
011・210・5744
A5判 128頁 1404円



鞆いたがきの創業者板垣英三が1950年に15歳で丁稚奉公をしてから70年にわたり鞆づくり一筋に生きてきた生涯と、ものづくりとは何か、北海道赤平の地での可能性などについて、JR北海道の内広報誌で特集を長年執筆している北室かず子氏がまとめています。

本書は3章構成に山本昌邦と板垣英三の対談などが収録されています。第1章では創業時に精魂込めて作り上げた鞆、鞍シヨルダ―について、いたがきのものづくりへのこだわりが紹介されています。第2章では板垣英三のあゆみ、第3章では新天地となった赤平でのこれからの展望が描かれています。

いたがきでは太古の昔から行われてきたタンニンなめしの革を使いものづくりがされています。革職人が憧れるこの革に熱を加えて行う捻引きや研磨、丈夫なナイロン糸での縫製、丹精込めた手仕事、自分の技術を惜しみなく注ぎこむ職人の熱き思いが伝わります。ものづくりに携わる方や経営者の方はもちろん、多くの方に職人魂を感じていただきたい。（柏）

自然の恵み

アイヌのごはん

藤村 久和 監修
デーリマン社 発行
011・231・5261
B5判 128頁 1944円



「アイヌのごはん」といえば皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。北海道で暮らしていても意外と知らない方が多いのではないのでしょうか。アイヌのごはんは日本

ます。

1695年、64歳まで生きた円空は、仏の道を説きながら全国各地を訪ね、造像を重ねました。円空が立ち寄った後に残された素朴な仏像たちを、人々は体が痛む時に同じ所をさすり、時には削ってお守りや煎じ薬にしたとされています。

造像に使用した木材は、ヒノキやスギ、ヒバが多くありますが、樹種にはこだわらなかつたようです。

住民が守った上ノ国の円空仏

北海道にある円空仏のうち、後年に本州から持ち込まれたものを除くと、45体が確認されています。

上ノ国町には現在6体の円空仏があります。道内では乙部町の7体に次ぐ多さです。円空が訪れたころ、前浜でニシンが豊富に取れた上ノ国には140〜150軒の住家があつたそうです。

上ノ国にある円空仏の種類は、十一面観音菩薩立像、阿弥陀如来像が各1体のほか、観音菩薩坐像が4体です。病気の流行、漁での水難事故も多かったことから、人々を常に観ていて救いを求める声（音）があれ



国指定史跡の勝山館跡は1470年頃築かれた山城で、蝦夷地中世の生活様式を今に伝えています（上ノ国町教育委員会提供）



旧笹浪家で展示する阿弥陀如来像。漁師の網に掛かったとの言い伝えがある（上ノ国町教育委員会提供）

する観音菩薩の円空仏が多く残つたという見方があります。このほか、有珠山や駒ヶ岳、樽前山といった活火山を鎮めるためにも観音像は造られたようです。

上ノ国観音堂の十一面観音菩薩立像は当初、地元の山神社にまつられていました。明治政府が神道国教化に向けて行った神仏分離政策で、神社に仏像を置くことが禁じられた際、住民の一人、長谷川喜平太が隠して難を逃れたため、「さへだの観音様」と呼ばれたそうです。

観音様は、胴体に比べ頭部が黒ずんでいます。これは昔、着物を着せられていて、明かりや囲炉裏から出たススが頭部だけに付着したと考えられています。

「円空さん」の真っ黒な顔は、地域の生活に溶け込み、住民から愛されてきた証とも言えそうです。



顔が黒ずみ摩耗した「円空さん」

上ノ国町
人口約5,000人の農林水産業の町。15世紀ごろ、北海道南部の日本海側は、上の国、太平洋側は下の国と称されていたことが町の由来です。

食の基本をおさえたものが多く、素材の味を生かして調理し、自然に感謝してみんなで楽しくいただきます。本書はアイヌの料理を項目に分けて、アイヌの食文化や食材などの話を交えながら紹介しています。

アイヌ文化を長きにわたり研究されている北海学園大学名誉教授の藤村久和先生が監修し、レシピ本ではありませんが、アイヌの方々に調理方法や知識などを取材し分かりやすくまとめられた伝承の1冊となっています。

巻末にはアイヌ料理で使用する山菜や動物の図鑑、アイヌの方々の食にまつわる思い出話も掲載されており、「食」や「命」に対する考え方から、改めて命や家族の大切さを実感することができます。スーパードで手に入る食材を用いたレシピもあり、ぜひ簡単なレシピからチャレンジしてみたいかがでしようか。その料理を楽しく食べることが、アイヌの文化を理解することにもつながります。（大）

イザリに生まれて

林 幸子 著
共同文化社 発行
011・2551・8078
四六判 224頁 1296円

著者は道東の寒村で障がい者と

して生まれました。医者からはその姿に三日と持たないであろうと言われます。「イザリ」という言葉は、差別的な表現があり日常生活において耳にする機会はありませんが、幼い彼女は自分の名前だと思っほど、周囲から呼ばれつけてきました。



この物語は著者の実話であり、何故そのような身体になつてしまったのか、実の母親の話から始まります。自活のために洋裁を身につけ社会人となつた後も、結婚し夫からのDVや姑の心無い言葉に傷つきながら、子育てや仕事を懸命にこなす借金返済に追われる毎日を過ごします。しかし、愛情を注いで育ててきたはずの養女は未婚の母となり、やがてその子どもを置き去りにして行方知れず……。

次々と身にふりかかる困難を受け止めながらも、日々真摯に向き合い必死で生き抜いてきた人生が綴られています。ラストを読むことで、生きるとは、幸せとは何かを感じさせてくれます。（五）

新刊情報

書名の下に数字は日本図書コード(J-S-B-N)及び雑誌コード。特記以外は税込価格。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

- 札幌から日帰り ゆつたりハイキング**
菅原 靖彦 著 978-4-89453-944-0
B 6判 288頁 1944円
- 決定版 北海道 道の駅ガイド**
2019-20 紺谷 充彦 著 978-4-89453-946-4
A 5変型判 272頁 1728円
- ニブルの丘**
澤田 展人 著 978-4-89453-945-7
四六判 296頁 1944円
- 北海道パークゴルフ場ガイド**
2019-20 北海道新聞社 編 978-4-89453-947-1
B 5判 180頁 1404円
- 札幌の路面電車100年**
北海道新聞社 編 978-4-89453-948-8
B 5判 176頁 1944円
- イチから分かる北方領土**
北海道新聞社 編著 978-4-89453-951-8
A 5判 128頁 864円
- さわこのじてん**
今 美幸・今 佐和子 著 978-4-89453-953-2
A 5変型判 160頁 1620円
- 礼文・利尻 花と自然の二島物語**
978-4-89453-952-5
袖田 美野里・宮本 誠一郎 著
B 5変型判 96頁 1944円
- モーリー52号 自然再生**
978-4-89453-950-1
北海道新聞野生生物基金 編
A 4判 72頁 972円
- 一度は泊まってみよう！ 北海道の温泉宿**
小野寺 淳子 著 978-4-89453-949-5
A 5判 200頁 1944円
- 道新プラス 道新受験情報**
2020大学・短大特集 16747-05
北海道新聞社 編
B 5判 296頁 800円
- 北海道新聞社
〒001札幌市中央区大通西3-1-6
011-210-5744
- 現代中国の就労・自立支援教育**
都市コミュニティにおける労働・福祉と成人教育
肖 蘭 著 978-4-8329-8849-6
A 5判 270頁 5184円
- 清代小説『鏡花縁』を読む**
一九世紀の音韻学者が紡いだ諸説と遊戯の物語
加部 勇一郎 著 978-4-8329-8849-3
A 5判 346頁 9180円
- 戦前期北海道政党史研究**
北海道拓殖政策を中心に
井上 敬介 著 978-4-8329-8844-8
A 5判 264頁 5400円
- 宗教とウェルビーイング**
しあわせの宗教社会学
櫻井 義秀 編著 978-4-8329-8850-9
A 5判 438頁 6264円
- 【宗教社会学論集 第1巻(上)】**
緒言／プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神／プロテスタント諸信団と資本主義の精神
マックス・ヴェーバー著／戸田 聡 訳 978-4-8329-2517-5
A 5判 452頁 5832円
- マスマープレメントのデジタル空間解析**
山岸 宏光・志村 一夫 編著 978-4-8329-8232-1
B 5判 176頁 4968円
- 紅い戦争のメモリースケープ**
旧ソ連・東欧・中国・ベトナム 978-4-8329-8845-5
越野 剛・高山 陽子 編著
A 5判 250頁 3456円
- 北海道大学出版会
〒000札幌市北区北9条西8丁目
011-747-2308

球体のパレット タグチ・アートコレク ション
978-4-8915-3632-2
岩崎 直人・津田 しおり(札幌芸術の森美術館)

野田 佳奈子(北海道立帯広美術館) 編
B 5変型判 127頁 2376円

空を泳ぐ 本庄英雄詩集
978-4-8915-3625-9
本庄 英雄 著

A 5判 159頁 2160円

ハスカップとわたし
978-4-8915-3601-1
特定非営利活動法人苫東環境コモンズ 編著

A 5判 274頁 1728円
中西出版
〒003札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
011-785-0737

明治期北海道の裁判制度
978-4-8328-1904-7
牧口 準市 著

新書判 260頁 1296円
北海道出版企画センター
〒008札幌市北区北18条西6丁目2-47
011-737-1755

完本 丸山健一全集18〜21 貝の帆
978-4-434-24730-9
丸山 健一 著 978-4-434-24731-6
978-4-434-24732-3
978-4-434-24733-0

丸山 健二 著
四六判 576頁 各7020円
柏籐舎
〒002札幌市中央区北2条西3丁目
011-219-1211

北海道大学もつひとつのキャンパスマップ
978-4-909231-15-9
隠された風景を見る、消された声を聞く

北大ACMプロジェクト 編
四六判 208頁 1728円
寿郎社
〒007札幌市北区北7条西2丁目
011-708-8566

Reipian(リプラン)北海道 125号
491039401089-1

A 4判 188頁 5000円
札幌社
〒003札幌市西区山の手4条3丁目3-29
011-641-7855

働きやすい農場づくり
978-4-66453-064-4
NPO法人オルタナティブ・アグリサポータープロジェクト 監修

B 5判 116頁 1440円
北海道協同組合通信社
〒004札幌市中央区北4条西13丁目
011-231-5261

自然の恵み アイヌのごはん
978-4-66453-058-3
藤村 久和 監修

B 5判 128頁 1944円
テリイマン社
〒004札幌市中央区北4条西13丁目
011-231-5261

自費出版・団体出版

昭和のエポネケステネケ パネポネポ

坂本 勝昭 著
遊幻舎Q 発行
118ミリ×178ミリ 208頁
1500円

紙のば オンネットー
山本 修一
木版画 26センチ×35センチ

「足寄郡足寄町東部の阿寒摩周国立公園内にある周囲2.5キロの湖オンネットー。鬱蒼たる原始林に抱かれた神秘的な湖面を前にして、この環境が貴重な自然資産として、これからも保たれることを願いつつ描きました。」
全道美術協会(全道展)会友 札幌市在住